新潟の水辺だより
niigata-mizubenokai report
Vol.81
●編集発行
特定非営利活動法人
新潟水辺の会
●発行日
2011年06月01日

report 01

2011・3・11 巨大地震に思う
―明治以降の近代化の総決算、新たな一歩のために―

2011年3月11日、東北日本太平洋側は最大マグニチュード9.0という歴史上最大級の地震群に襲われ、巨大な津波の襲来を受け、死者・行方不明者は28,000人に達する甚大な被害が発生した。さらに、福島第一原子力発電所（東京電力）は稼働中の原子炉を緊急停止することができたが、冷却システムが津波に破壊され作動せず、水素爆発など様々な事故の中で、放射性物質拡散を起こし、原子力発電所から20km圏内などの避難が敢行された。また、東京電力は電力の供給力不足となり、広域にわたる“計画停電”を実施するに至った。

この災害をどのように考えたらいいのか？

この地震発生時に、私は太田川に関する委員会でちょうど広島にいた。広島からの帰りの列車は遅れに遅れたが、ますます深刻化する被害情報の中で、この災害は明治維新以降の日本における近代化の総決算が迫られているように感じた。また、この4月13日、14日に、ささやかな支援物資を届けながら、田老、宮古、釜石、気仙沼、石巻、仙台、須賀川市江花（藤沼ダムが決壊し8人が犠牲になった）を視察した。まだ余震がつづき、自然の怒りは治まらず、500kmに及ぶ海岸線を中心として、28,000人の悲しみが彷徨っており、生き残ったわれわれは何をしたらいいのか、腹をくくって覚悟すべきものがあるように感じた。

第2次世界大戦は、広島と長崎への原爆投下で終結し、この敗戦は明治以降の**近代化**の破綻を明らかにしたのであった。その結果、日本国民は憲法9条の戦争放棄という覚悟を決めたのであった。この平和憲法はなし崩しに壊れてきているが、それでもいまだに力を持っていると考えている。私は昭和24（1949）年に小学校に入学しているが、そこで平和憲法と民主主義の教育を受け、「敗戦は、残存する封建性ゆえに近代化が遅れていたからだ」と教えられた。

しかし、**近代化**とは何であったのか？

極論するならば、自然に対しては、自然を克服と利用の対象としか見ず、技術力で徹底的に自然を収奪し、人に対しては、自然と人の直接的関係や共同体における絆を前近代的束縛と捉え、それらからの自由を標榜して、個人主義を徹底し、市場経済を推し進め、地方住民の犠牲の上に、中央集権を強化してきた、その経過こそが近代化であったと言えよう。（地方の犠牲の上に近代化があることは、水俣病の発生とその後の対応経過がその典型例であり、電力供給という面においても、福島や柏崎で発電された電力が首都圏の人々の生活・生産を支えていることにある。まさに今回の原発事故は、その首都圏は計画停電と放射性物質に怯えているが、全町避難という故郷を失うという究極の犠牲を地方に強いていることで、そのことは明らかであろう。）

明治の近代化は、欧米列強諸国からの、アヘン戦争に見られるような侵略を防ぐためには、避けて通れない道であったと言える。しかし、その後の近代化は、目先の利益のみを追求して、子孫にとっても必要欠くべからざる自然を食いつぶし、共同体を破壊し、持続性が担保されない社会をもたらしたといえる。確かに、第2次世界大戦後、一時的には経済の高度成長によって繁栄を極めたが、近年は経済もままならず、1千兆円に達する借財や地球温暖化問題などで、この社会が持続的に維持されるのか不安に覆われている。

その最中に、1000年に1度といわれる巨大地震に襲われたわけである。この巨大地震に対する今回の被災状況は、土木を専門とする私から見れば、土木構造物や建築物の耐震設計・補強が進み、避難所や物流を支えており、避難計画もある程度機能したと考えている。しかし、巨大防潮堤・水門による津波対策は打ち破られ、原子力発電は懸念されてきた大きな問題を発生させた。この状況からみて、やはり明治以降140年に及ぶ近代化のあり方を反省し、今後どのような社会をつくっていけばいいのか、“戦争放棄”と同様な覚悟が必要なのではないかと考える。

それでは、これからの社会はどうあるべきか？

個人の自由は大切であるが、もう一度、自分の住んでいる地域の自然を見つめ直し、どのように自分が生かされているのかを意識し、少々不便かもしれないが、自然を収奪することなく、自然と共生していく以外に方法はないと考える。その不便さは、地

■水辺レポート

域の人々との新しい人間関係の中で受容していくしかないように考える。今のわれわれの生活はあまりに贅沢であり、この贅沢を地震後も継続しようとするならば、もう一度、原子力発電や巨大防潮堤を再建するしかないであろう。しかし、技術力に過度に依存したハード的防災力は、それをいくら高めたとしても、それが故に安心し切ってしまい、それを超える自然力に襲われるという悪循環に陥る。今まで何度も作りかえられてきた今回の防潮堤の破壊はその悪循環を実物実験で示したと言える。

確かに、毎年のように災害に遭うのでは生きていくのは大変である。しかし、寿命 80 年といわれる一生のうち、1 度か 2 度床下浸水に遭ったり、短期的な避難生活を余儀なくされたとしても、壊滅的な被害を回避できるのであるならば、それは受容すべきでないかと考える。ハード的な防災力として 30 年から 40 年に一度程度の安全度を対象とするならば、安心しきることはなく、災害の記憶と危機管理の技術も世代から世代へと継承されて、避難訓練も徹底することになり、結果として被害が最小限に抑えられるに違いない。必要なのは、サバイバルできる個人の生命力であり、共同体として、大地の記憶を伝え、互いに支えあうソフトな防災力でないかと考える。すなわち、菅首相が言う“自然災害に強い社会”ではなく、“自然災害をうまく受け流し、自然の恵みに感謝し、自然と共生した社会”が求められていると考える。

今回津波で壊滅的な被害を受けた都市の復興は、再び巨大な防潮堤で守るのではなく、以上のことを念頭に置いて、原則的には、生活拠点は高台に移し、低地は生産拠点として、“少なくとも命だけは助かるとともに、自然と共生した居心地の良い都市づくり”が求められていると考える。

われわれは、今の繁栄が長続きしないことを予感している。そして一方、われわれが 1 万 6000 年前の縄文人の血を引き継いでいるように、われわれの子孫が今後 1 万年も 2 万年も存在し続けていることを望んでいる。それを可能にする社会を、自然と人との関係、人と人との関係を見直し、再構築していくことの覚悟が必要でないかと感じている。

（2011・4・20 修正）

大熊　孝
（NPO 法人新潟水辺の会代表・
新潟大学名誉教授）

report 02

被災県の岩手から

ケンブリッジとジュネーブへの出張から帰国した 3 月 9 日、上野から盛岡に向かう新幹線の中で地震（M7.3）に遭いました。そのため、新幹線が緊急停車しました。翌々日の 3 月11日、あの大地震が起きたのです。ものすごい揺れでした。建物の外に出ようとして慌てて階段で転んだら元も子もないと思い、机の下にもぐりこみました。その日から学校に 4 泊、避難してきた学生の世話や安否確認に追われました。

津波の被害を受けた三陸海岸は講演や生物調査などでたびたび訪れたことがあります。石巻、気仙沼、釜石、大槌、山田、宮古等々、ニュースで繰り返し出てくる地です。アカマツが 1 本だけ残っているあの高田松原にも行ったことがあります。

盛岡のスーパーからビールが消えた。買占めではなく、入荷しないのだそうです。

停電していた盛岡で灯りが燈ってまもなく、巷で自粛ムードが漂っていたころ、同僚を飲み屋に誘いました。飲み屋はガラガラでした。直接の被災地でもなければ、努めて通常どおりの生活をすべきだというのが昔からの持論だったからです。これも支援の一形態です。やっと自粛することを自粛しようという論調が目立つようになりました。寄附金の多寡ではなく、各人ができることをやればいいのです。

私の郷里・長岡市は、中越地震で被災した経験があったことから、迅速に支援態勢に入ったようです。地震翌日、消防隊を偵察に出し、協定を結んでいる市には物資を提供、三陸に職員を派遣する一方、南相馬市などからの原発難民を受け入れています。

東日本大震災は、さまざまなことを考えさせる機会でもありました。人間の寿命は 80 年前後ですが、この寿命期間を超えて起こる災害体験をどのように経験のない子孫に伝えていくべきか。技術への過信が被害を増大させたのではないか。ソフト面の重要性。日本の中で東北地方が占める役割。エネルギー問題。それにも増して、自然への畏怖を改めて抱かせてくれました。

会員　金子　与止男

report 03

人と自然が向き合うということ

4月8日、朝日新聞のオピニオン面に次のようなコラムを書いた。

《遺体はどれも、一カ所に寄せ集められたように折り重なっていた。

リボンを結んだ小さな頭が、泥の中に顔をうずめている。細い木の枝を握りしめたままの30代の男性がいる。

消防団員が教えてくれた。

「津波は引くとき、川のようになって同じ場所を流れていく。そこに障害物があると、遺体がいくつも引っかかってしまう……」

遺体は魚の腹のように白く、ぬれた布団のように膨れ上がっている。涙があふれて止まらない。隣で消防団員も号泣していた。

震災翌日から現地に入り、18日間取材を続けた。最初の数日はまともに記事が書けなかった。目の前の惨状に、何がニュースかわからなくなり、気がつくと空ばかり見上げていた。

「なぜ、こんなにも多くの人が――」。がれきの中を歩くたびに、怒りと悲しみに満ちた疑念が、胸のなかに押し寄せた。

被災地では、土砂にまみれた時計の多くが、地震が起きた午後2時46分ではなく、午後3時20分前後で止まっている。津波が押し寄せた時間だ。多くの命が奪われたのは地震発生の直後ではなく、おそらく約30分後のことだ。

そう思う度に、胸が張り裂けそうだった。「30分」は決して長くはないが、何かしらの対策を講じることができた時間だからだ。

その与えられた時間を有効に使える対策や手だてを、私たちは事前に準備することができていただろうか。答えはたぶん「ノー」だろう。今回の津波では、海岸沿いに建てられた病院や老人施設でたくさんの人が亡くなっている。多くの人が車で移動し、避難所さえも津波にのまれた。

私たちが真っ先に取り組むべきこと。それは、あの30分に人々がどう動いたのかを克明に記録・検証することだと私は思う。それを新しい国や地域の仕組みにいかした上で、後世にしっかりと語り継いでいこう。

高齢者や障害者を災害からいかに守るのか。いざという時に正しく動ける知識と勇気を、子どもたちにどう身につけさせるのか。そのためには何よりも、あの30分の教訓と反省が必要だ。

悪夢からもうすぐ1カ月。多くの人が今もがれきの中をさまよい歩くこの国で、できるだけ多くの記憶と言葉と映像を残そう。生き延びることができた私たちの、それが最大の使命だと感じる。》

数日後、社会部長から電話を受けた。「被災地に赴任してみるつもりはないか」という内容だった。

「好きな所に住んでいい。できるかぎり現場の近くで、思い切り記事を書いてみないか」

少し悩んだが、結局受けることにした。赴任日は5月10日。宮城県の南三陸の近くに拠点を構え、被災地の今後を見続けていこうと思う。

2008年から2009年にかけて1年間、信濃川の水枯れ問題について取材した。そこで学んだことは、自然のたくましさと尊さだった。そのたくましくて尊い自然が今回、多くの人々の命とかけがえのない生活を奪った。

我々は自然とどうむきあっていけばいいのか。頭ではなく、胸で感じとってこようと思う。

会員　三浦　英之
（朝日新聞記者）

ミニコラム1　“仙台からの音楽の贈り物に感謝”

5月6～8日新潟市で開催されたラ・フォル・ジュルネ新潟本公演に行きました。今回の音楽祭は自粛ムードで開催も危ぶまれましたが、新潟から音楽で元気をということで開催されました。また、災害の影響で直前で来日できなくなった演奏者も多く、演奏者や曲目が変更となった公演も多くありました。来日できなくなったドイツの楽団の代わりに登場したのが仙台フィルハーモニー管弦楽団でした。（オープニングセレモニーでの篠田市長のスピーチによると新潟市が仙台市への災害派遣をいち早く行ったことも関係しているようです）僕は初日のダン・タイ・ソン氏のピアノ、仙台フィル、井上道義氏の指揮によるベートーヴェンのピアノ協奏曲第4番を聴きました。演奏そのものも素晴らしかったのですが、地元での練習もままならない苦しい状況に屈することなく新潟に来てれたという背景が重なり、より一層の感動と希望を与えてくれる演奏となり、会場は熱狂に包まれました。（会員　杉山　泰彦）

■水辺レポート

report 04

九州の伝統的な治水・利水、水文化の知恵を探訪する旅レポート

新潟水辺の会一行８人（男性２人、女性６人）は目的地の九州へと新潟空港を離陸しました。

自称「晴れ女」を自負するメンバーのおかげで天候は心配なしです。鹿児島をはじめ九州各地は春を思わせる暖かさで、川辺の風が心地よく自然の恵みに越後からの８人がたっぷりと浸かることのできた４日間でした。

◆２月24日（木）

行程：新潟空港発⇒伊丹空港伊丹空港発⇒鹿児島空港着レンターカーで九州自動車道より鹿屋市串良川の川原園井堰（ローテク＆エコテクな堰）、桜島⇒フェリーで鹿児島へ⇒川畑井堰

◎鹿児島空港で上野敏孝氏、児玉澄子さん、北畠清仁氏、西村照子さん、曳田京子さんの出迎えを受け、案内していただきました。（昼食は児玉さんの手作り弁当、夜の宴会と二次会までお世話になりました。大熊代表の蒔いた種が実ったことを実感です。）

鹿児島・児玉さんのマンションにて

◎桜島はとても美しく私たちを温かく迎えてくれましたが、運のいい人だけが見ることのできるというイルカの大群は×でした。残念！残念！

◎串良川の柴堰は、３月下旬に掛け替えられる日を今か今かと待っているようでしたが、自然に優しくこの地域、この川の営みになぜかピッタリの風景に心が和みました。

◎川畑井堰は、先人たちが伝えてきた技と人間の温もりが感じられました。

◆２月25日（金）

行程：鹿児島⇒人吉⇒川辺ダム予定地⇒瀬戸石ダム⇒荒瀬ダム⇒郡築三番町樋門⇒緑川の治水施設・轡塘（くつわども）

早朝散歩：甲突川の西田橋・高麗橋・玉江橋、旧鹿児島刑務所正門（大熊代表は欠席）

◎磯庭園、尚古集成館（島津家の歴代藩主の愛した磯庭園は、梅の花満開で桜島の美しさは素晴らしく、新しい時代を築いた薩摩藩の人々の強い誇りを感じた）昨日に引き続き上野さんより案内をしていただきました。

◎緑川の治水施設の轡塘へひた走りに車を飛ばし目的地に着いたときは感動でしたが、夕暮れが早く暗くて何も見えず残念！

◆２月26日（土）

行程：熊本城⇒水前寺成趣園⇒佐賀市（昇開橋、城原川治水施設、石井樋）

早朝：散歩旧第五高等学校「熊本大学構内建物群」

◎熊本の緑川の治水施設である白川の鼻ぐり井手を見学（加藤清正によって整備された鼻ぐり（農業用水）が現在でも180haの水田を潤しているとの現場を見て昔の人の土木技術の確かさに感動）

◎午後より城原川を考える会の佐藤悦子さん、泉委佐生氏、新潟水辺の会の事務局に居た寺村親子と合流し城原川、石井樋を見学。

◎筑後川に架かる昇開橋より開門作業見学・城原川の治水の現状と課題を佐藤悦子さんより見学を通して学びました。（静かに流れている城原川は安全な川ではなく台風や梅雨前線により洪水に見舞われ、上流域には野越しといわれる堤防の一部が低い箇所に存在していました。）

石井樋で寺村親子と一緒

◎夕食は田中秀子さん、長野真理子さんも合流、食事会（佐賀県庁屋上レストランからの夜景はきれいでした。料理、お酒と話が弾みました。）

◆２月27日（日）
行程：久留米水天宮、恵利堰、山田堰、大石堰、朝倉三連水車⇒福岡空港⇒新潟空港
早朝散歩（成富兵庫の墓、佐賀藩鍋島家墓所・高傳寺、西芦刈水路）

田中秀子さん、長野真理子さんの案内で。筑後川を左右に眺めながら車の中から川の歴史と今までの取り組みを聴きました。
◎山田堰（筑後川の中流に220年前に築造された山田堰は、大小の石を敷き詰めて水流を斜めにせき止め、水田に水を引く日本で唯一の灌漑設備です。石や堰全体の形などはほぼ当時のものと同じとのこと、技術の確かさに感銘です。）

福岡空港発→新潟空港へ帰路につく。（福岡空港の混雑振りにはヘトヘト・・・飛行機に乗ったときはホッとしました。）

越後八人衆全員の写った唯一の写真（熊本城）

現代の効率優先の時代に先人たちが水との戦いで残した水文化の知恵が凝縮されている九州で地元の方々から説明を聞き、現地をしっかりとこの目で確認できたことはとても有意義な旅でもありました。旅を終えてまもなく一瞬にして覆った未曾有の東日本大震災を目の当たりにして、自然と共生した水力発電を今一度見直してはどうかと球磨川の荒瀬ダム等の風景を思い出しています。

副代表　梶　瑤子

report 05

震災ボランティア活動に参加して

1. はじめに

東日本大震災は３月11日に起こり、幸いにして私の実家である山形の被害はほとんど無かった。しかしながら、友人・知人の多い宮城県、福島県、岩手県などが大きな被害を受け、被害者、被災者が多く出た。地震発生後は、同じ東北人として何かやれることはないかと四六時中考え、早い段階での災害ボランティア参加を決意した。しかしながら、今回の地震は、以前の地震とは比較にならないほど甚大かつ広範囲で、被災地のボランティアセンターが立ちあがるまで２週間かかり、また、現地や周辺でのガソリンや食料調達も困難で、なかなか現地入りができなかった。ようやく自分が現地入りしたのは地震発生から２週間後の３月27日であった。活動日数は延べ７日間（塩竈２日、多賀城５日）。

2. 現地での災害ボランティア活動の流れ

現地ボランティアセンターで受付け。その時に名前・住所・連絡先などを記入し、保険にも加入。以外に怪我することが多い。受付が終わると、被災者のニーズとボランティア活動者とのマッチング（見合い）が行われる。ここでは、自分のできる仕事を見極めて意思表明し参加する。活動内容にもよるが、６人～10人くらいのグループに分けられて、グループで活動・行動する。仕事の内容は主に再生可能な住宅の掃除、周辺の瓦礫の撤去、活動時間は９時～４時。

3. 活動紹介（塩竈３月27日、28日）

塩竈では、津波で家が泥に被り、家の中に堆積した泥の撤去と掃除。手順としては、浸水した部屋にある家具、電気製品などを外に運び出し、使えるものとゴミの分別。次に床や畳の上に堆積した泥の撤去。塩竈では泥の中に重油が混じっており、粘り気が強くて比重が重い。泥の排除が非常に大変で、１件から多いところでは土嚢袋で50～100袋(1袋30kg以上)発生する。次は水を多く含んだ畳の撤去。昼食・飲み物は各自持参、トイレは被災地宅で借りる。

塩竈の被災状況としては、基本的に港近くの低地での被害が大きい。高さ4m以上の津波が来襲し、港

近くでは小型船舶が道路まで押し流されて、あちこちで道を塞いでいた。また、道路の脇には、流されてきた車が相当数放置された状態。ライフラインについて、水道は概ね復旧していたが、電気・ガスは一部のみ。多くの小売店舗、ガソリンスタンドは１件も開いない状況であった。塩竈ボランティアセンターからの注意事項として、余震が頻発しており、津波来襲の可能性もあることから、活動場所に着いたら、各自避難場所を決めてから活動するように言われ、被災地入りしたことを痛烈に感じた。幸いにして災害ボランティア活動中に大きな余震は無かった。

道路に横たわる船（塩竈３月 28 日）

4. 災害ボランティアに参加している人達

災害ボランティアには日本全国から集まっている。一緒に活動した人達は高齢者が多い。とは言っても、常日頃体を動かしている元気な人達。やはり、定年退職して時間が自由になるのだろう。これらの人達の多くは日本のどこかで災害があるとすぐに駆けつける人達である。あとは私のように、１日だけでも手伝いに行きたいと思っている人達。それに地元の人達で、特に高校生や大学生が多く参加していたのには驚いた。上越から来た人は電車を乗り継いで、仙台まで来て、仙台からは折りたたみの自転車で塩竈まで来ていた。名古屋から来た人は夜行バスで来て日中ボランティア活動をして、その日の夜の夜行バスで帰っていった。0泊２日。

5. 感謝の言葉（多賀城）

見ず知らずの人達が日本各地から来てボランティア活動をしてくれることに感謝します。震災後、親戚や知人から無事を確認する電話がきたが、誰一人として泥出しなどの掃除に来てくれた人はいない。遠くの親戚より近くの他人。

運び出されたゴミ（塩竈３月 28 日）

6. 現地ボランティアセンターの声

１日でも活動していただけるのは本当にありがたい。どうしても、みなさんの休日の都合上、ボランティアが土日に集中してしまう。できることなら、分散または継続的にやっていただけるとありがたい。

7. おわりに

災害ボランティアに参加して、新潟で周囲の人達に話をすると、以外に関心のある人が多かった。私と同じように、地震直後から現地で困っている人に対して何かできることはないものか、いてもたってもいられないと思う人が多くいたようだ。ただ、気持ちはあっても情報収集、手段がわからないようであった。情報としては、各市町村でボランティアセンターが立ち上がっており、インターネットで収集可能。不明な点は直接電話するのが望ましい。ボランティア活動の場所が遠方で宿泊を伴うことから、個人で宿泊先を確保できない場合はボランティアツアーなどもあるようなので、それに参加するのも一つの手。災害ボランティア活動に参加する際には、事前にマニュアル（http://www.nsv-net.jp/cat54/）、心得（http://www.nsv-net.jp/cat54/cat55/）を一読することをお勧めします。

会員　斉藤 晃

report 06

東日本大震災、M9.0 最初の被害者となった藤沼ダム決壊

◆地震、津波、原発災害の陰で

5月2日現在、死者・行方不明者が25,700人になっているこの東日本大震災。震災より一ヶ月以上経った4月13日、福島県須賀川市の藤沼ダム決壊場所を大熊代表と一緒に訪れた。

震源地から数百km離れた福島県内陸部の須賀川市でも震度6強の揺れで大きな被害が出ていた。

◆藤沼ダム（藤沼湖自然公園）

須賀川市北西部にある高土山（729m）のふもとに豊かな水をたたえた藤沼湖と、湖を囲む雄大な自然公園（約80ha）が広がる。

公園内にはキャンプ場、パークゴルフ場などのアウトドア施設やレジャー施設「水と緑のふれあいランド」も完備されている。湖北部には温泉がわき出ており、整備された露天風呂からは眼前に、春は桜、秋には赤く色づく紅葉が湖面に映える美しい風景が楽しめたという。

湖畔にある、水と緑のふれあいランド

藤沼ダムは、福島県須賀川市江花にある、江花川（阿武隈川水系）の支流に建設された灌漑用アースフィルダムと呼ばれる台形状に盛り土をしたダムで、堤高17.5m、堤頂長133m、湛水面積20ha、総貯水容量150万m^3。

長年、農業用水の不足に苦しんでいた旧長沼、桙衝、稲田の1町2村の住民が国や県に要望し1937年(昭和12年)、県営事業として着工、工事の大半を地域住人が人力で行い、12年の歳月をかけ、長沼地区にある865haの田畑に農業用水を供給し、地元の江花川沿岸土地改良区が管理している。

◆三陸沿岸を巨大な津波がのみ込む数分前

3月11日午後2時46分、M 9.0の巨大地震が三陸沖に発生した。この直後ダム湖の堤防が決壊し、三陸沿岸を巨大な津波がのみ込む数分前に、田植え前でほぼ満水の湖水（150万m^3）がほぼすべて流出し、ダム下流3km以上の長沼地区まで達し泥流で8名の犠牲者と、全壊19戸、床上浸水33戸、床下浸水22戸の被害が出ていた。

新潟を6時に出発し9時少し前に現地の滝集落に着いた。途中の簀ノ子川に架かる二つの橋のアルミ製の欄干は半数以上流され、原型を留めていなかった。山すそや川沿いの全壊家屋は撤去され整地されてはいたが、その痕跡をいたる処に残し、上流からはわずかな水が流れていた。

泥流で寸断された途中の道路

その流れをたどって沢を100mも入ると、杉林が根こそぎなぎ倒され、更に進むと岩だらけの中にガードレールが無残に下流に折れ曲がり、根元を剥ぎ取られたコンクリート水路のがれきが広がる。

約20分その惨状を見ながら登ると、藤沼湖の堰堤の決壊現場に出た。堤は幅約100m、高さ20m以上がV字に大きく削られていた。

上部の堤には地震後一ヶ月も経っているのに大きな亀裂がいくつもパックリと口を開け、湖面に水はなく、湿った土砂が対岸まで続いていた。

生々しい決壊現場

会津方面の山にはまだ薄っすらと雪が残り、どこにでもある故郷の景色である。しかし、一方の決壊現場を覗き見ると、そこは正しく下流の8名の命を奪った沢が広がる。大自然の優しさとその袖に隠れた自然の猛威に戦慄の震えが

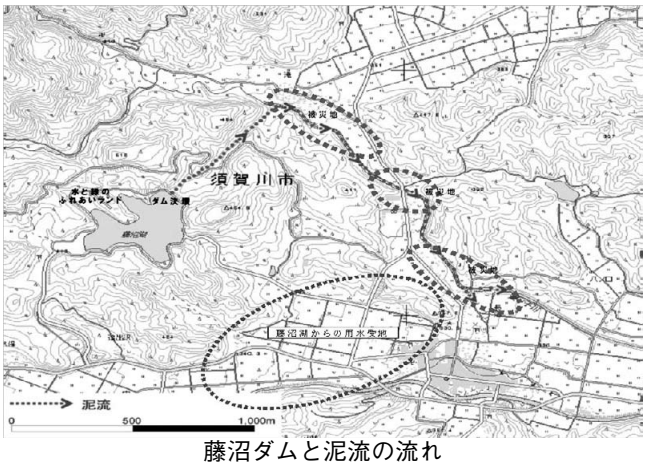
きた。

下流の滝集落の70台のご夫婦に話をお聞きすると、揺れで外の物干しに掴まるのが精一杯で家も倉も倒れると思ったと語って頂いた。2回目の激震が襲ったあと直ぐにものすごい音と共に泥流が襲ってこの惨状だと言い、地元では前よりここが抜ける（決壊）のではないかと言われて来たとの事であった。

揺れがひどく物干しに掴まっていた滝集落の方

◆見栄えに拘った災害、後世への伝承

このダム湖の水は泥流に飲まれた滝集落の用水として使っていたのではなく、下流の長沼地区の農業用水として使っており、以前から冬場の満水状態では危ないと言われていた。しかし、その事が管理者の耳には届いていたのであろうが、水と緑のふれあいランドからの自然美と藤沼湖を一望できる景観、つまり見栄えを優先した悲劇となった。



藤沼ダムと泥流の流れ

行方不明者の捜索は連日行われたが、3月29日打ち切られた。4月24日、支流から約40キロ離れた阿武隈川で14歳の女子中学生の遺体が発見された。だが、1歳の幼児がいまだ行方不明になっている。

震災後の東電・福島第一発電所の原発災害の中で話題にも上っていない事実がそこにあり、後世にこれらを含め災害を語り継いで行かなければならない。

世話人　加藤 功

report 07

災害を学ぶ中で連帯を学ぶ

3.11の大震災は長岡市で遭った。帰りに津波の実況をTVで見ていつもの何cmでなく何mと聞き、えらいことになっていると思った。釜石、気仙沼、相馬、茨城、千葉と次々と大災害が報告され、想像を絶する天変地異とはこういうことをいうのかと。

郡山の実家も瓦が飛び、大型TVや本棚が倒れる震度6弱。母たちも難を逃れたが水道管破裂というので翌日に水130Lと食料を積んで向かった。被害は、人と一緒に家が津波にのまれた地域に比べかすり傷ともいえないと思ったが、その後原発が暴走し、母たちは4.14 ～ 4.20まで県境津川に避難する二重被害者に。原発海岸は、風評被害を含め四重苦を受けることになった。

ふるさとの災害が他人事ではなかった私は息子と弟を誘って連休ボランティアに。報道が、三陸や原発被害地域に報道が偏り、あまり情報が無いいわき市勿来に実家から向かった。150名ほどが各地から参加。香川県からマイカーで10時間かけ東京泊で駆けつけたS氏、富山県から一人で参加のアラスカ出身のW君など若い人が大半だ。いわき市勿来錦地区は地震津波被害で死者も出なかったが浸水1.2m程度の津波被害でも写真のように車の上に車が乗るほど衝撃があったようで1階はほぼ壊滅。20度回転した家もあった。老婆が来て「家はもう住めないけど、今、猫の餌が買えないのがつらい」には言葉がなかった。水害同様に泥上げは大変だが自然災害のすさまじさに対応できる災害に強いまちや生活の知恵を学ぶことができると思うが、それと同時に、息子など若者には、労働でない災害救助ボランティアの達成感を共有する中で生まれる連帯感が見えない学びになるはずと思った。

世話人　相楽 治
（福島県郡山市に実家）

report 08

東北への想い

「3.11」後、連日報道されるがれきの山。自然の恐ろしさをこれほどまでに思い知らされたことはありません。

がれきに乗り上げた漁船

そのかたわらで水仙が、春を忘れず咲いているのを被災者がみて、一瞬でもほっと笑顔になれるのを目にし、水仙でさえ希望を与えることができるのだと感動したものです。東北は毎年訪れる大好きな場所ですので被災地のことを思うと心が痛みます。

がれきの被災地

東北に魅せられた役重真喜子さんは、東大を出て農水省時代農村研修で東和町役場勤務のとき牛に出会い、そのままキャリアを捨て現地の人と結婚し「ヨメより先に牛 (べこ) がきた はみだしキャリア奮戦記」という本を出され今は、花巻市役所総務課長さんとして東北を支えて下さっています。

石川啄木や宮澤賢治を生み、「雨ニモ負ケズ」の質実で献身的な精神にあふれた地で、以前の姿を取り戻して私たちにやすらぎを与えてくれることを願いつつ、一日でも早い復興を心より、お祈りせずにはいられません。

会員　長谷川 恵美子

report 09

東松島市・災害ボランティア活動報告

2011 年 4 月 6 日（水）、宮城県東松島市の津波被災地区に入り、災害ボランティア活動を行って参りましたので、ご報告いたします。作業内容は、被災住宅にて廃棄する家具・電化製品・カーペット・ふとん・畳などを運び出すことと、瓦礫と泥の排出作業でした。

この活動は、東松島市のボランティア・センターがインターネットで呼びかけた募集に応募したもので、東京・埼玉の友人とともに 3 名で参加いたしました。

なぜ東松島市を選んだのかと言いますと、東京在住の友人が仙台市の出身で、学生時代に東松島市の野蒜（のびる）地区に家庭教師のアルバイトに通っていた思い出があり、ニュースで「野蒜地区が津波で壊滅」とか「野蒜地区に 200 人以上の遺体」という報道を聞いて、じっとしていられなくなって私たちにメールで呼びかけてきたからでした。

東松島市の災害ボランティア募集の良い点は、仙台市の県庁前までバスで迎えに来て、終了後にまた県庁前まで送ってもらえるので、仙台市に行くことさえできれば参加できるという点です。（当時はまだ、県外ボランティアの参加を受け入れ体制の整わない被災地が多かった）

私は仙台市に旧知の友人と妻の親戚がおりましたので、前日（5 日）に見舞いの品を携えて、夫婦で仙台市に入り、6 日朝に東京・埼玉の友人と合流することにいたしました。

当日(6 日) は朝 7 時 45 分に宮城県庁前に集合し(東京・埼玉の友人と合流)、東松島市のマイクロバスで現

■水辺レポート

地に向かいました。（妻は別途、仙台市青葉体育館のボランティア・センターに出向いて、災害支援で送られてきた衣類の分類の仕事に参加いたしました。）

バスに同乗した当日編成のボランティア隊は25名、大部分が仙台市や周辺の地元の若い人たちで、県外の人間は私たち3名の他1名（新潟県長岡市の人）でした。

東松島市は仙台市から北東に向かって、松島町と石巻市の間にあります。バスは、仙台市から三陸自動車道を通って北上し、鳴瀬奥松島ICで降りて東松島市に入りました。

高速道路を降りて右折し、鳴瀬川沿いに海に向かって南下、河口近くで右折して西に向かって掘られた東名（とうな）運河に沿って進み、運河が松島湾に抜ける手前の「新東名」地区で、災害ボランティアの要請があったお宅に到着しました。

私たちが支援に入った新東名地区は、海に並行して掘られた東名運河（野蒜運河）とJR仙石線（せんせきせん）の線路の内側（陸側）にあり、住宅は残っていますが、1階部分の天井まで津波が押し寄せてきた地区です。家の中に流れ込んだ瓦礫と泥水で、家具もふとんもぐしゃぐしゃにかき回されたような惨状でした。

仙石線の線路と東名運河の外側（海側）に目を向けると、海岸まで数キロメートルの住宅が建ち並ぶ野蒜地域があったのですが、そこには遠くの海と区別のつかない水面が広がっていて、建っている建造物はほとんど見当たりませんでした。

その先には奥松島と呼ばれる島々の景勝が展望され、海水浴場が広がる風光明媚な観光地があり、いろいろな観光施設や多くの民宿が建っていたのですが、いまは瓦礫と水の原が広がるばかりの風景になってしまいました。（多くの死者・行方不明者が出た地域です。）

あらためて凄まじい津波の威力を実感し、茫然とした気分になりました。

災害ボランティアを要請して、被災した自宅をなんとかしようとしているお宅は、家が跡形もなく流された被災者よりはまだ良いと言えるのかも知れませんが、そんな方々も自宅に住めるわけではなく、その多くは避難所暮らしをされている方々でした。

25名のボランティア隊は2班に分かれて、それぞれ午前中1軒、午後1軒の計4軒のお宅で作業をおこないました。

作業に必要な装備は、帽子、防塵マスク、ゴム手袋、長靴、（雨具上下）です。濡れた泥はもちろん乾いた埃の中にも細菌が多く、小さな傷から破傷風になった実例が出ているので、傷を負った場合はすぐに申し出ることという注意がありました。釘を踏む怪我が多いそうです。

私たちボランティア隊は支援要請のあった家の方と作業内容の確認をおこない、最初に歪んで動かなくなったサッシ戸をバールではずして開口部を広げてから、瓦礫とともに壊れた家具、泥にまみれたカーペット、ふとん、その他いっさいの物を外に運び出しました。私は泥の中から位牌とご本尊のお軸を見つけて家の方に手渡すことができましたが、たいへん感謝をしていただきました。

洋服ダンスは壊れて中には泥と瓦礫が詰まっていましたが、和風の桐箪笥は優れた密閉性を発揮して中の

着物は損なわれておらず、伝統的家具・桐箪笥の防御力には驚きました。

高価な電化製品などを含めて生活用具のいっさいが使い物にならず、家の方の指示を受けて瓦礫・ゴミとして外に積み上げましたが、家の方の気持を考えると胸が痛みました。

作業中に、私たちに注意事項を話していた地元ボランティアセンターの担当者が釘を踏んでしまい、担当を途中交代して病院へ行くというハプニングがありました。要注意です。

家の中から家具類を運び出した後は、折り重なっている畳を運びましたが、濡れた泥だらけの畳は重かった。縁側から門まで畳を並べて一輪車の道を作り、最後の泥だし作業をスピーディに進めることができましたが、活動の中で生まれた知恵に感心しました。

家の中の瓦礫・家具類・畳・その他のいっさいを運び出し、泥を丁寧にシャベルで掬い取って作業終了です。家の方に感謝されながら次に向かいました。

午前中で一軒終了すると、バスで東松島市のボランティアセンター（社会福祉協議会の建物）に運ばれ、ここでトイレ、昼食休憩となりました。昼食・水は各自持参です。

昼食時に東京の友人と話しをしていたら、彼が学生時代に家庭教師をした教え子が、野蒜地区で民宿業・釣り船業を営んでいたのですが、その教え子が津波で両親と小学生の息子を失って「何を頑張れば良いのかわからない・・・」とブログでつぶやいているのを発見して、励ましのメールを入れたんだよと語ってくれました。

午後も、もう一軒同様な作業をおこない、ボランティアセンターで雨具・長靴を洗って午後５時前にバスは仙台市に向けて帰路につき、午後６時には、宮城県庁前に到着、解散となりました。

当日のボランティア隊は平日ということもあって、仙台市およびその周辺地域の若い人が多く参加していました。バスで私の隣りに座った若い女性は、「高校を卒業したが、国公立の大学受験日が震災の翌日で受験できなかった。１年浪人して受験をめざすことを親が許してくれた。今は少しでも被災者の役に立ちたい。」と語っていました。

また、休憩時間には煙草をふかしていた豹柄のジャンパーのツッパリ風のお姉ちゃんも、泥だし作業のときは一輪車を押して男性顔負けの力仕事をこなしていました。

若い男性の参加者は、年配の私をたててくれたり、手を貸してくれたり、とても好感の持てる青年が多く参加していて、私はボランティア活動をともにした若い人たちから、日本の将来に向けて明るい希望をもらったような心持ちになりました。

私はやむにやまれぬ気持で４月初旬に被災地に出向いてボランティア活動に参加いたしましたが、今年のゴールデンウイークには連休を使って、全国から多くの人々がボランティアとして被災地に入って活動している様子がテレビで報道されていました。

私は、日本人同士誰かの役に立ちたいと思う人たちが多くいることを感じて、嬉しい気持になりましたが、被災地には人の手で取り組まなければ片付かないことがたくさんありますので、日本国民総ボランティアの心つもりで、長丁場の被災地支援に取り組んでいくことが必要であろうと思っております。

インターネットのボランティア募集情報を見ておりましたら、東松島市では宿泊できる本格的なボランティア活動の募集を行っていました。現地の受け入れ体制も整ってきているようです。還暦過ぎの私でも、まだまだ出番は多いぞと思っております。

世話人　佐藤　哲郎

■水辺レポート

report 10

鮭稚魚が発電所タービン通過するときの生存率調査（報告）

標記調査は、今年で3回目である。そもそもこの調査を行うきっかけは、日本の大河、信濃川の上流千曲川にて初期の頃、年に60～70tの漁獲高を記録していたことから、当会の石月副代表が本来の河の姿に戻したいという思いのもと調査活動が、2006年から地球環境基金の助成金を受けて始まり、2009年からは三井物産環境基金の助成金に引き継がれている。

その活動の一環として、長野県へ鮭稚魚の放流について伺ったところ、長野県が1980年から20年間にわたって小学生を中心に「カムバックサーモン」という活動で鮭の稚魚899万尾を放流し続けてきたが、3～4年後の秋に成長した鮭がなかなか戻ってこなかったため、その原因の一つとして、下流に位置する発電所のタービンに吸い込まれて、そのほとんどが死滅してしまうので、教育上好ましくないということから、放流が打ち切られたのである。

このことを知って、本当に死滅するのかどうか資料を捜したが、見あたらないため実験をして確かめることになったのが始まりである。

ダム下流での捕獲網設置

前置きが長くなったが、新しく会員になられた方、途中からこの調査を知った方、会員外の方々などへのお知らせとご案内から再度、投稿しました。どうぞ興味をもたれた方がおりましたら、この調査活動に参加してみませんか。

さて、調査概要と結果は、以下の通りである。

4月16日(土)午後から新発田市赤谷発電所のタービンにて実験開始である。天候は午前中が雷で雨模様、午後に曇り空、防寒装備とカッパ装備で集合し2班に分かれて、発電所上流の稚魚放流班と発電所下流の稚魚捕捉班である。

発電所は、発電タービンと取水口との落差が約50mあり、上流班は稚魚を1000尾数えて、取水口に放流、下流班は捕捉網を放水口下流にて設置して待つ、50mを落下して来る水流の水圧に人力は5分ともたない。悪戦苦闘の末に捕捉作業を終了した。

下段に3年間の調査結果を示した。

年度	投入尾数	投入尾数	生存尾数	死亡尾数	
				損傷有	損傷無
2011年	1,000尾	476尾	252尾	42尾	182尾
	%	47.6%	53.0%	8.8%	38.2%
2010年	1,013尾	486尾	243尾	34尾	209尾
	%	48.0%	50.0%	7.0%	43.0%
2009年	930尾	444尾	192尾	61尾	191尾
	%	47.6%	43.3%	13.7%	43.0%

結果は、タービンを通過後、損傷して死滅する稚魚は、捕捉数の10%程度で、40%がショックによる圧死（?）、約50%が生存していることが、確認されたのである。

20年間稚魚放流して、成魚が遡上しなかった最大の原因は、千曲川の西大滝ダム（東京電力）から信濃川の宮中ダム（JR東日本）放流口までの間の流量不足と思われる。

それは、当会が5年前から千曲川で稚魚放流を行っており、昨年の10月20日に河口から253km上流の上田で3年漁のメスが産卵を終えて、アユ用の簗場で65年ぶりに発見されたのである。

昨年は、宮中ダム不正取水問題から水利権が取り消され、全流量が本来の川に放流された結果、鮭が上田まで遡上できたものと思われる。

今後は、宮中ダム、西大滝ダムとも河川環境保全の観点から水利権取得時の維持流量＋環境放流がなされることになっている。鮭の遡上が長野で普通に見られる本来の川に戻ることを期待したい。

世話人　山岸　俊男

report 11

今年も盛り上がった栗ノ木川さくら祭り

今年も、4月17日（日）に「第8回栗ノ木川さくら祭り」が盛大に開催されました。1週間前はつぼみの状態の桜も、当日は7分～8分咲きとなり、快晴の下、多くの来場者があり、皆さん思い思いに楽しまれたことと思います。

催しは例年どおりに、栗ノ木川水辺の広場の対岸（左岸側）をメインステージに、沼垂小学校の生徒による万代太鼓，新潟総踊り，コーラスや歌謡ショーなど賑やかな催しで、さくら祭りを盛上げました。

川面と乗船場の賑わい

また、右岸側の桜の木の下では、フリーマーケットも開かれました。新潟水辺の会も、恒例の乗船体験を行い、午前10時の開始から午後2時の終了まで、ほとんど休みもなく船を行き来させ、延べ315人に乗船いただきました。

今回は、大板合せ1艇、船外機船2艇、カナディアンカヌー3艇の計6艇を使用し、万代高校カヌー部の生徒さんや毎回板合せの漕ぎ手をして頂く宇田さん（佐渡で漁師をされていた元船頭さんとのこと）の応援を頂き、乗船された皆さんに川面からの桜（風景）を楽しんで頂きました。

松野世話人が漕ぐ板合せ（さすが名船頭）

宇田さんが漕ぐ板合せ（さすが元船頭さん）

なお、今回の乗船体験では、東日本大震災の被災地への義援金の募金も行い、18,100円を集めることができましたので、日本赤十字社を通し被災地へお渡しします。

最後に、板合せの漕ぎ手をして頂いた松野世話人・宇田さんを始め、協力して頂いたスタッフの皆様、今回も無事に終わることができました。本当に、ご苦労様でした。

世話人　安田　幸弘

ミニコラム２“災害報道とメンタルケア”

震災発生後に無気力やうつ的な状態になり、なんとなく体調が優れないという人も多かったのではないでしょうか。自分や近しい人は誰も被災していないとはいえ、これだけの大災害が与えるショックは大きく、動揺や不安を抱かずにはいられませんでした。

そんな状態でテレビの災害報道を見ていると、どんどん気分が陰鬱になって体調が悪くなっていく感じがしました。そこで、震災発生直後の日曜日からはテレビを見ないことにしました。

また、不安を和らげるには睡眠を十分にとることが効果的と言われていますので、早めに寝るように心がけました。

このような対処をしたことで心身の調子が著しく悪くなるということはありませんでした。自分は無意識にやったことですが、Facebookページ“精神科医 樺沢紫苑”で同じ話題が取り上げられていたのでこのコラムを書く際に参考にさせていただきました。（会員　杉山　泰彦）

■水辺レポート

report 12

炊き出しプロジェクトに参加して

昨年から、新潟市立木戸小学校の地域教育コーディネーターを勤め、地域と学校の教育ボランティアなど学校に出席し先生方と意見交換をしている毎日で多用な関係もあり水辺の会世話人会にも顔を出さずご無沙汰しています。

炊き出しに訪れた避難所

この度の東日本大震災に心を痛めておりましたが、新潟 NPO 協会・新潟 JC の方々と炊き出しプロジェクトを立ち上げ 4 月 30 日、7 名 (私は調理担当) で福島県相馬郡新地町小屋樋掛田の新地町保健センター他、新地町尚英中学校・新地町駒ヶ嶺公民館など 3 ヶ所に片道約 4 時間 30 分を掛けて 2 台の車で約 250 食の熱々チャンコうどん (肉・鶏・魚・野菜たっぷりの) を届けてきました。

ここで準備をしたところ移動するよう指示を受けた

玄関先で、プロパンガス･鍋を用意して出来あがり次第、被災者の皆さんに自由に食べてもらおうと準備仕掛けた所、市役所職員が来て、ここで作ると他所から来たボランティアが並び渡さない訳にもいかず被災者に行き渡らないと困るから裏の見えない所で作って出来たら知らせて欲しい。当方で運ぶからとの事で大急ぎで仕込み 12 時 30 分には出来あがり他の 2 ヶ所にも運び 13 時 30 分に食は完了。久々に熱々野菜とチャンコうどんが食べられたと皆さんから喜びと感謝の言葉を頂いた。

終了後、周辺を見渡すと道路の向こうはがれきの山で目を覆いたくなる状況で、立っている家の窓は無く屋根は布団干と思ったら布団ではなくビニールシートを被せ雨漏りを防いでいるようでした。

今回同行した炊き出しプロジェクトのメンバー

あまりにも悲惨な状況で継続したボランティアが必要。今後の予定では 11 月 31 日まで現地ボランティアコーディネーターと連絡を取合い土曜日・休日に炊き出しに行く事になりました。次回、私の出番は 5 月 28 日 (土) に決まりました。

世話人　星島　卓美

災害義援金募金のご報告

2011 年 3 月 11 日に発生しました東北および関東地方の地震被災者の方々に対し、心からお見舞いを申し上げます。

被害の無かった新潟水辺の会が被災者の方々に何ができるかを 3 月下旬の世話人会にて検討し、中越地震の際に被災地で活動している団体に義援金を送ったように今回も、東北で活動している個人や団体に義援金を送ることになりました。

4 月 19 日、宮城県気仙沼市で「森は海の恋人運動」を行っている畠山重篤さんへ 3 万円、仙台を中心に活動している「NPO 法人水・環境ネット東北」に 2 万円をお送りしましたことを報告いたします。

事務局　加藤　功

report 13

被災地ボランティア活動参加報告

4月5日、6日そして4月24日、25日の二回、福島県相馬市と南相馬市の災害復旧ボランティアに参加してきました。相馬市には妻の友人が住んでいて、地震直後は連絡が取れず約一週間後に埼玉県の娘さんの家に避難中との知らせを受けひとまずほっとしていたところでした。とにかく、たいした役にも立たないだろうけど行くなら相馬にしようと、一回目は4月4日の仕事を早仕舞いして夕方出かけました。

磐越道新津インターから高速に乗り、約二時間半で福島市内のサービスエリアに到着。我が社の軽ワゴンはご存知のとおり畳が敷いてありますので、かねて用意の布団をセットして宿泊の用意も完了。翌日の作業に備えて就寝したのが10時過ぎでした。このSAの便所は地震で倒壊していて仮設の便所でした。売店の中も商品がほとんどなく地震発生から3週間という現実を実感することになりました。翌朝は6時過ぎに起床、車内で登山用バーナーをつかって朝食を済ませ、高速道を降りて給油後、中通りから浜通りへ抜ける国道115号で山道を1時間半走行して相馬市に到着。

市の中心部は屋根のいたんだ家屋が目立つ程度で被害状況がよく見えません。9時前に中村城跡近くの商工会議所に置かれたボランティアセンターに到着。既に受付を待つボランティアの列が長く続いていましたが、手際のいい対応でスムーズに受付からマッチングへと進み、この日の任務が決定。千葉県から来た60代の3人ずれと東京方面から来た若者たち、それに我々二名からなる10名の部隊でいざ現場へ。センターのある中心部から相馬駅の近くを経由して松川浦という美しい内海のある景勝地へ向かうと、車窓からの光景に変化に言葉を失うことになりました。高台に打ち上げられた大きな漁船、津波にさらわれ一階部分をうしなってようやく立っている家屋。漁港に近い一画はがれきに覆われていました。

この日は、松川浦を望む4階建ての旅館の後片付けでした。若主人は従業員たちと階上に避難して前方から来る津波に気を取られている間に、岬の反対側からの津波が隧道を通ってジェット噴流のように押し寄せてきた恐怖を語ってくれました。昼食をはさんで約4時間あまりの作業で足の踏み場もなかった物置などの内部や通路がようやくわずかながら片付いてこの日の作業は終了。センターへ戻って報告後解散です。

翌日の作業に備えて夕食と宿泊の準備ですが、お座敷車両とはいえ車中泊ですので夜間に使用できるトイレを探さなければなりません。コンビニも9時には閉店、駅は常磐線の不通で管理が行き届かずトイレは汚れ放題でした。でも贅沢は言っていられませんから、我慢できなくなったら駅に向かうことに決めて、就寝。

港に折り重なるように打ち上げられた漁船

翌日の任務は前日の旅館のすぐ近くの民家の後片付け。この日は、自衛隊のダンプが道路に出された家財などの撤去作業をするということで、今日を逃したら後片付けが遅くなるということでご主人も心配していた様子でしたが、京都から来た3兄弟を含む8人の部隊の作業で3時過ぎに無事終了して、ほっ。何日も仕事を休んでいられる身分ではないのでこれで一回目は帰宅しました。

2回目は前より少し早く午後3時過ぎに出発し、その日の内に相馬市に入り、宿泊。今回は、ボランティア先を決めるきっかけとなった相馬市在住の妻の友人との再会が楽しみでした。一日目の作業は相馬市の南に位置する小さな谷間の集落の民家の後片付けでした。海から2キロ以上離れた海抜7mほどの高台の民家でしたが、それでも部屋の鴨居付近まで水の跡がありましたから10m近い津波だったことがわかります。一日目の夕食は友人宅でご接待を受け、2日目は南相馬市へ。任務は救援物資の仕分けと被災者への配分のお手伝いでした。私は男性もの衣料の係。「まだ妻が見つからないので毎日泥の中で探していてズボンがいたんでね・・・」という初老の男性、厳しい現実でした。一緒に働いた青年は浜松から来ていて「津波の映像を見ると涙が止まらなくて・・・」という横顔が印象に残っています。南相馬市では原発被害のための立ち入り禁止区域に近いところでの活動でした。町中がなんとなくシーンとしていたのが気にかかりましたが、またお手伝いに来ますと言い残して帰宅しました。

世話人　淺井敬一

新潟水辺イベント情報　新潟水辺の会

●第 11 回新潟水辺の会通常総会・懇親会

日時 : 平成 23 年 7 月 9 日（土）15:30 ～ 17:00
会場 : クロスパルにいがた（中央公民館）5F ホール
内容 : 第 11 回通常総会（H22.6.1 ～ H23.5.31）
その後 17:30 より信濃川ウォーターシャトルにて懇親会を行います。（会費 5 千円）
問い合わせ先 : 加藤世話人、森本世話人

●環境と人間ふれあい館 開館 10 周年企画事業

日時 : 平成 23 年 7 月 31 日 (日) 時間は未定
会場 : 新潟ユニゾンプラザ 多目的ホール
内容 : 講演会 C.W. ニコル氏、原田正純氏
問い合わせ先 : 環境と人間ふれあい館 025-387-1450

●通船川の清掃と親水活動

集合場所 : 通船川河口の森
集合時間 : 08:30
日程
6 月 11 日 (土) 親水活動
6 月 12 日 (日) 川掃除
7 月 9 日 (土) 親水活動
7 月 10 日 (日) 川掃除
8 月 6 日 (土) 親水活動
8 月 7 日 (日) 川掃除
9 月 10 日 (土) 親水活動
9 月 11 日 (日) 川掃除
10 月 8 日 (土) 親水活動
10 月 9 日 (日) 川掃除
11 月 13 日 (日) 川掃除
12 月 11 日 (日) 川掃除
予定人員は 10 名です。川掃除には昼食が付きます。
問い合わせ先 : 横山通世話人

編集後記 : 皆さん、女性ボーカルの Yucca(ユッカ) をご存知でしょうか。NHK の大河ドラマ「龍馬伝」の挿入歌を歌っていた (スキャットですが) 方です。新潟でもなじみ深い「千の風になって」やトヨタのアルファードの CM で「夜の女王のマリア」も歌っていました。東京音楽大学出身でクラシック畑ですがポピュラーも歌うジャンルにとらわれない歌手です。新潟とは縁が深く、今まで 56 回新潟のステージで歌っています。会場はコンサートホールだけでなく、古町や NEXT21 などでの無料ライブも多く、その歌声に感動したファンで「Yucca とユッカい～な仲間たち♪」というファンクラブも出来ています。秋川雅史のように、いつブレークしてもおかしくない歌手です。これからも新潟でのステージが数多くあると思いますので、まだ知らない方はその歌声を一度聴いてみてください。　　編集人 : 森本　利

入会案内

この会は、遊び心半分・真面目心半分で活動しています。
ウォッチングには、家族ぐるみで子供達も一緒に参加したりしています。
自分の足で水辺を歩くなりして、自分でも感じたことから、自分の水辺を発見していく、あるいは考えていくことを大切にしています。
今までとは違った視点から、あらためて自分の身の回りに目を向けて見ると、同じものを見ているのに今までとは違うものに見えてきます。新しい発見があります。自分の世界もまた少し広がってきます。
この会も色々な分野の人達が集まって、それぞれの世界がもっと広がっていくような出会いの場を提供できる会にしたいと考えています。あなたの参加お待ちしております。

■設立年 :1987 年 10 月 15 日■目的 : 水辺に関わる自然、歴史、文化、生活、風俗、スポーツ、レクリエーション並びに科学技術を探り、これからの水辺の望ましい姿を考え、地域の生活向上に寄与することを目的とする。■代表者 : 大熊 孝 (新潟大学名誉教授) ■会員数 : 個人 181 名・法人 9 団体 (2011 年 5 月 1 日現在) ■活動 : 信濃川・千曲川の大河復活活動 / 都市河川通船川・栗ノ木川再生活動 / 重文萬代橋を核とした水都新潟の創造 / 会報「新潟の水辺だより」発行 / 水辺シンポジウムの開催 / 長野県水辺グループとの交流会 // 水辺環境に関する調査・研究支援 etc. ■年会費 : 個人会員一口 1,000 円を 2 口以上、家族 (2 名以上) 会員一口 1,000 円を 3 口以上、賛助会員 (法人など) 一口 5,000 円を 2 口以上

入会申込書　　年　　月

フリガナ 氏　名		男・女 歳
特技や 水辺への想い		職　業
住　所	〒 （　　）　－	
メールアドレス		
勤務先	〒 （　　）　－	

注）紙面の都合上、縮小しています。
200％程度拡大コピーをしてご使用下さい。

●発行：特定非営利活動法人新潟水辺の会
●事務局
〒 950-2264
新潟市西区みずき野 4-7-15 大熊 方
Phone 025-264-3191　Fax 025-264-3260
ホームページ
http://www17.plala.or.jp/mizubenokai/
メール　mizubenokai@plum.plala.or.jp
●会員数　個人会員 181 名、法人会員 9 団体
（2011 年 5 月 1 日現在）